

千島新田は、東成郡千林村（現旭区）の^{おかじまかへいじ}岡島嘉平次により、明和5年（1786年）から順次開発されました。地名は千林村の「千」と、岡島の姓の「島」をつなぎ合わせて「千島新田」と命名されました。

大正時代の千島町一帯は西区から移転してきた木材業者により、関西随一の木材市場となり、木材の集積のため、木津川と尻無川を結ぶ大正運河（延長1,963m・幅45m）が大正12年に完成しました。住之江区の平林貯木場へ移転するまで、この運河を中心に貯木池として利用されていました。

昭和44年9月に発表された「千島計画」は、区のほぼ中央、もと大正運河や貯木池のあった千島町一帯に「港の見える丘」を造るという大規模な計画でした。この人工の山は地下鉄工事の残土など、約170万立方メートル（ダンプカー57万台）の土砂で造られ、標高33mで「昭和山」と命名されました。

千島公園（11.2ha）の中心に位置するその頂上からは、六甲や二上、葛城、金剛、和泉の山並みとともに港大橋、なみはや大橋、千歳橋、新木津川大橋、千本松大橋などが眺められ、麓には「せせらぎ」も整備され、その恵まれた自然は区民の憩いの場となっています。

